

令和 4 年 度  
宮崎国際大学 教育学部  
総合型選抜(第 1 回)

試 験 問 題  
【小 論 文】

|         |
|---------|
| 受 験 番 号 |
| 氏 名     |

## 小論文 教育学部

問題 元AKB48のメンバーだった高橋みなみさんは子供時代にいじめを受けていました。今ではNHKの教育番組「いじめをノックアウト」のMCなどを務めています。以下の文章は子供時代の体験をもとに高橋さんの考えをまとめたものです。高橋さんは何を子供たち・大人たちに伝えたいと思っているのか、またあなたは子供たちを指導する立場（教員等）としてどのようなことに気を付け指導していきたいと思うか、600字以内で述べてください。

歌手・タレント 高橋みなみさん

体が弱かった小学校低学年のころ、給食を戻してしまったことでもからかわれるようになりました。中学では仲の良かった友人にAKB48に入ることを言い出せなかったのをきっかけに、無視されるようになりました。

休み時間、みんな自分の仲の良い友達に引き寄せられますよね。私の周りには誰もいない。どうしていいかわからなくて、階の違うトイレに行って時間をつぶしていました。言葉に表せないつらさがありました。

学校は行かなきゃいけないものだって思っていました。早く週末や長期休みがきてほしかった。でも、親には言えませんでした。自分が弱い立場にあることを、近い人にほど知ってほしくないというプライドのようなものがありました。言ったからといって何も変わらない、という思いもありましたし。すごく苦しくて、もがいていました。

家ではあえて元気に振る舞っていた気がします。よく「学校に行きたくない」とは言っていました。ただ、孤立しているとは言えず、「AKB48の活動で疲れたから」という理由で。何とかして学校にいる時間が短くならないかと探っていました。SOSというと大げさですが、何らかのサインを出していたのかもしれませんが。

保護者や身近な大人には、子どものSOSに気付いてあげてほしいですね。私もそうでしたが、悩みをなかなか言い出せない子は多い。難しいことですが、よく子どもを見て何か少しでも変化があったら、根気よく話を聞いてあげるとか、周りから探ってみるとか。

大人には大したことでなくても、子どもにとって一大事、ということもあります。子どもの繊細さにチャンネルを合わせてあげること。取り返しのつかない後悔をしないよう、子どもを後回しにしないことが大事ではないでしょうか。

いじめをめぐるテレビの教育番組で、子どもからの様々な相談を受けてきました。その経験からも思うのは、やっぱり夏休み明けは心配だということです。子どもにとって、学校は人間関係が全てといっても言い過ぎではないと思います。そこでせっかく築き上げたものが、1ヵ月も休むとリセットされてしまう。ゼロからまた関係をつくらなければならない怖さがあるのは、すごくわかります。

悩んでいる子たちに言いたいのは「いまいる学校が世界の全てではない」ということです。つらければ休めば全て解決するとか、そう単純でないことはわかっているつもりです。勉強

する機会がなくなってしまうのは心配ですし、将来への不安もありますよね。

ただ、ルートは一つではないと思うんです。私も社会人になっていろいろな人の話を聞いて、中学を卒業して早めに起業したとか、いろいろな人がいるとわかりました。大人になってから大学に行く人もいます。

みんなと同じことができないという悔しさもあるかもしれませんが、でも、芸能の仕事をしていると、周囲に合わせるのが苦手だけど、その人にしかない強みがある人もたくさんいます。当事者からしたら、「そんなきれいごとを言われても私には個性なんてない」と思うかもしれません。それでも、自分の個性を自分で認めてあげてほしいと思います。

みんなと同じにできることが素晴らしいわけではない。それが、社会人になってからの私の気付きです。学校に行くことは大切ですが、子どもたちはすでに十分がんばっています。心がついていかなくなってしまうならば、それ以外にも選択肢があることを意識してほしいと思います。

(朝日新聞 2021年8月22日 聞き手・高浜行人)

\*たかはし・みなみ

1991年生まれ。アイドルグループ「AKB48」1期生としてデビューし、初代総監督を務める。2016年に卒業。13年からNHKの教育番組「いじめをノックアウト」のMC。

令和 4 年 度  
宮崎国際大学 教育学部  
総合型選抜(第 2 回)

試 験 問 題  
【小 論 文】

|         |
|---------|
| 受 験 番 号 |
| 氏 名     |

問題 やまざきまりさんはマンガ家で、作品「テルマエ・ロマエ」(手塚治虫文化賞・映画化)などでよく知られています。以下の文章は子供時代のやまざきさんが画家を目指した時の大人(教員・母親・マルコ)の対応が描かれています。それぞれどのような対応をしたかをまとめ、それについてあなたはどうか考えるか、また美術教育はどうあるべきか、600字以内で述べてください。

あなたには、美術はどれぐらい必要ですか。日本では「お金になるかどうか」がすごく大切な軸ですよね。芸術はあまり必要ないと思われがちです。でも、そうじゃないよ、という話をします。

私が中2の時、先生に「将来は？」と聞かれて「教科書の余白や壁に絵を描く癖がある。だから画家がいい」と答えたら、「食っていけないぞ」と鼻で笑われました。

その時、母が「フランダースの犬」の絵本をくれたのを思い出した。ベルギーで両親のいないネロという少年が、画家を目指すけど評価されない。貧しいまま、あこがれた画家の絵がある教会で、寒さの中、犬と一緒に死ぬ話。「画家になるのはこういうこと」と言う母に納得できなかった。

その時、母は本を他に2冊くれました。「シンドバッドの冒険」が載った「アラビアンナイト」と「ニルスのふしぎな旅」。子どもが知恵を出して危機を切り抜ける。私は「積極的に動かないネロがいけない」と言い、母はあきらめたそうです。

母は、お金にならなくても、オーケストラのピオラ奏者という好きな道を選んだ自由で変わった人です。「生きていけば何とかなる」と。先生に笑われて悩む私に母が「私の代わりに冬休みにヨーロッパに行って、知り合いにクリスマスプレゼントを渡して」と頼みました。

それは旅をさせる口実でした。「見てきてほしい物がある」と言われたのが、パリのルーブル美術館にあるモナリザの絵。母が大好きでした。

14歳の私は1ヵ月間、フランスとドイツに一人旅をしました。列車の乗り方を尋ねても、中2の英語は通じず、絶望的な気分になりました。でも、急に自分の奥の方で「冷静になれ。必ず手段はある」と声が聞こえた。タクシーで乗車券を見せたら、駅に行ってくれて「意外に何とかなるな」と。ピンチにならないと人の脳みそは働かない。

結局、モナリザは黒山の人ばかりで、あきらめました。その時、「ギリシャやローマの彫刻がぶわーっと並んでいるのを見たんです。「2千年も前にこんなのを作ったんだ」と衝撃を受けました。

「これだけ歳月がたっても残されていくものがある。お金にならなくても、やるべき仕事がある。それが芸術だ」という結論が私の中で出た。それを考えさせるのが母の狙(ねら)いでした。

旅の途中で出会いがありました。列車の中で、マルコさんというイタリア人のおじいさんに「家出少女か」と疑われた。説明しても信じない。さらに「絵が好きなのにイタリアに行かないのか」と。帰国後、母とマルコさんの文通が始まった。

高校に入り、「絵は趣味でいいか」と思いかけた時です。急に母とマルコさんが組んで

「高校をやめて留学しろ」と言いだし、イタリアで美術を学びます。ヨーロッパの人はお金になる仕事がいいと思わない。芸術家になりたい人を応援します。

世の中、何があるか分かりません。実は私の夫はマルコさんの孫です。夫に付いて中東の砂漠の国、シリアに行き、「お風呂に入りたい」と切実に願いました。「古代ローマには公衆浴場がたくさんあったのに、なぜ今はないの」と考えて漫画「テルマエ・ロマエ」を描きました。14歳の旅がなければ、この作品は生まれませんでした。

私は小さい時から漫画が大好きでした。空腹でも、漫画を読むと満足できました。芸術や漫画は心を満たす栄養素です。

美術の授業はとても大事な時間です。みんなが必要だと思うから、美術は古代から残っている。絵がうまいか下手かは関係ない。描きたいものを描こう。音楽も同じ。表現したいと思うことに意味がある。評価は後の話。私は自分が読みたい漫画を描いています。

ぜひ、一度は美術館に行ってほしい。絵の良さが分からなくてもいい。私は興味がなくても旅行に行かされ、扉がいっぱい開いた。自分が見ているものが世界のすべてじゃない、と知ってほしい。価値観の違いを感じられる場所が美術館です。

今は新型コロナで大変だけど、いつもはやらないことをやるチャンス。映画でも本でも、漫画でも触れてみてほしい。

待っていても、何も起きない。動き回って、行動してみてください。

(宮崎日日新聞 2021年8月12日)

令和 4 年 度  
宮崎国際大学 教育学部  
総合型選抜(第 3 回)

試 験 問 題  
【小 論 文】

|         |
|---------|
| 受 験 番 号 |
| 氏 名     |

## 教育学部 小論文

「大人になったらなりたいものに『会社員』と答える小学生が目立っている」ことが新聞に取り上げられています。それによると、第一生命保険の「大人になったらなりたいもの」の調査（以前は保育園・幼稚園、小学1～6年生が対象。昨年からは小学3年生以上）では、「男子は野球選手とサッカー選手が1、2位を占める年が大半。女子は、食べ物屋さんやパティシエなど、食べ物に関連した職業が97年以降、トップを維持」していたのが、昨年、「会社員」が男子の1位、女子の4位に初めて入ったとのこと。2位は、男子がユーチューバー、女子が教員。3位は男子がサッカー選手、女子が幼稚園の先生・保育士です。

宮崎県出身の漫画家東村アキコさんは、求められた意見（文章）のなかで、「大切なのは、幼い頃から夢を持つことです。もっと教育現場でその大切さを教えるべきでしょう。」と述べています。東村アキコさんの言う「夢」とはどのようなものをまとめ、あなた自身は「夢」をどのように考えるか、また教育現場で夢や希望を持つことの大切さをどのように教えるか、600字以内で述べてください。

小学生になりたい職業を聞いた調査で、男子の1位が会社員というのは信じられません。「大人向けに用意した答え」で、本音はSNSで語っているような気もしますね。

もしかしたら、コロナ禍で在宅勤務する親を間近に見て「ラクそうだな」と思ったのかもしれませんが、会社員は決して安定した職業ではありません。知り合いの会社員は、会うたびに会社が変わっています。

会社員志向は、職業や肩書で人の価値を決める風潮が最近、強まっていることも影響している気がします。私は漫画家という比較的、自由な職業なだけに、息苦しさを感じてしまいます。

漫画家になると決めたのは小学生のとき。純粋に絵を描くのが好きだったからです。調査で漫画家は女子の5位、男子は10位以下ですか？ 3位までには入っていると思っていたので、寂しいですね。

最近の若い世代は、「夢」について尋ねられると、就きたい職業を思い浮かべる人が多い。だから、「東京タラレバ娘 シーズン2」（東村アキコ著）の女性主人公は、「人生でかなえない夢は」と問われ、「やりたい仕事」を連想する、という設定にしました。

でも、よく考えると、おかしい話です。仕事が自分に合っているかは実際、働かないと分からないからです。そして、夢を仕事で実現できる人はほんの一握りです。

私は実際、夢を仕事にしたものの、やめたり挫折したりする人をたくさん見てきました。仕事とは、しょせんお金を稼ぐための手段に過ぎません。人間は夢を持たないとダメですが、仕事とは関係ないものでなくてはならない、と思います。私の夢は、海辺の景色のいいところに一軒家を建てて暮らすこと。不動産情報を入手して、いろいろと考えるだけで幸せです。夢は持つだけでなく、何歳までに達成すると時間を区切って生きるべきです。その点、最近のアラサー女性に、将来の夢も持たず、現状に満足する傾向が強まっていることは気がかり

です。

大切なのは、幼い頃から夢を持つことです。もっと教育現場でその大切さを教えるべきでしょう。夢を持つためにはまず自分の心の声を聞く。これまでの経験を思いだしたり、映画やドラマを見て刺激を受けたりするのもいいでしょう。周りの大人のダメだという否定の声には耳を傾けないことも大事です。

(2021年7月1日 朝日新聞 聞き手 笠井政基)

令和 4 年 度  
宮崎国際大学 教育学部  
総合型選抜(第 5 回)

試 験 問 題  
【小 論 文】

|         |
|---------|
| 受 験 番 号 |
| 氏 名     |

## 教育学部 小論文

[設問] 次の文章の中に家庭科は「ジェンダー問題と向き合える教科」とあります。なぜ家庭科が「ジェンダー問題と向き合える教科」なのか説明し、大箸信一氏や小平陽一氏の行動を踏まえて「ジェンダー問題」に対するあなたの考えを600字以内で述べてください。

### [資料]

50年前、中学校では女子は家庭科、男子は技術科を学び、高校では女子のみ家庭科が必修だった。1971年3月14日の朝日新聞の連載「男と女」では、高校時代に校内でただ1人、家庭科を選択した男性の言葉が紹介されている。

**最初は気軽に考えた。うちは女手が多くて、家事なんてやったことはない。だけど将来、家事が必要なこともあるんじゃないかな。**

金沢工業大学の箸信一教授(76)。都立戸山高校の卒業生だ。「家庭科の授業のこと、そして、大学院生時代に取材を受けたことはよく覚えていますよ」

男女は平等なのに、女子だけ家庭科が必修というのはおかしいのではないかと数人の男子とそんな話をしていたという。高1の担任が家庭科の先生だったこともあり、「ぼくたちも家庭科をとれないのですか?」と聞いてみたら、「いいですよ」。ただ、一緒にとるはずだった友人は転校し、女子の中にたった1人で授業を受けたという。

結婚し、父親となった箸さんは「正直そんなに家事はしてこなかった」と謙遜するが、料理や片付けなど父親も自然と台所に立つ姿を見せることで、「子どもたちには、家事は夫婦で協力するのが当たり前だということを伝えてきたつもり」と話す。

家庭科は、戦後の教育改革に伴い、小学5、6年で男女共修で設置された。中学、高校でも選択科目の一つとして男女とも選べた。しかし、高度成長期の1960年代、国の経済振興政策の影響を受け、中学校では「技術・家庭科」の授業が始まる。男子は技術科、女子は家庭科と、事実上の男女別学となり、高校でも「家庭一般」が女子だけ必修に。学校教育が「男性は外で働き、女性は家事をする」という性別役割分業を強めるかたちとなった。

79年、あらゆる分野で男女平等を実現する義務を課す女子差別撤廃条約が国連で採択され、日本も85年に批准する。家庭科は中学校で93年、高校で94年から再び男女共修となった。

当時、埼玉県の高校で化学を教えていた小平陽一さん(70)は、県の家庭科教員養成事業に手を挙げ、女子大で1年間勉強。95年から家庭科の教員になった。

化学を教えていた頃は、夫婦共働きで育児をする綱渡りのような日々だった。保育園の送迎や夕食作りなどもなんとかこなし、同僚からは「よくやっているね」と持ち上げられたが、妻は「なぜ女性がやるのは『当たり前』で、男性がやるとほめられるのか」とチクリ。

仕事と家庭の両立に苦戦した背景には、「生活技術のなさに加え、性別役割分業意識からくる『呪縛』があった」と振り返る。「家庭科は料理や裁縫の技術を学ぶだけでなく、ジェンダー問題と向き合える教科。男女共修になり、役割分業を推進する教科から、それを解きほぐせる教科に変わった」

分担割合は上昇

いまの30代以下は、男女ともに家庭科必修世代だ。

花王の生活者研究部が2006年と16年に、首都圏在住の既婚男性に家事分担などについて聞いた調査がある。06年、20～30代の夫（116人）が主に担当していた割合が高い家事は、「ごみ出し（出すだけ）」「浴室掃除」などだった。しかし16年調査での20～30代の夫（196人）は、17ある調査項目すべてで主に担当する割合が上昇。

15ポイント以上増えた家事は、「トイレ掃除」（13%→37%）、「食事の後片付け」（14%→36%）、「部屋の掃除」（13%→32%）など多岐にわたった。「夫は仕事、妻は家事」という意識は薄れてきたことがうかがえる。

一方で、ジェンダーをめぐる無意識の偏見は、そこかしこに残っている。

50年前の記事には、家庭科の学習を終えた大箸さんが書き残した文章が載っている。「家庭生活を合理化し、女性の家事への隷従（れいじゅう）をうちやぶり、女性の地位を高めるためには、男性の協力が必要である」

高校生だった自分が書いた内容について、大箸さんは言う。

「女性の地位を高める、といったことは、本来ならとっくに解決していなければいけない問題。ただ、当時の連載をまとめた本に書かれていることの多くは、残念ながら今も変わらないような気がします」

（朝日新聞 2021年2月28日 三島あずさ）

注 ジェンダー 男らしさ、女らしさといった、社会的・文化的につくられた性差